

社会主義と民主主義(一九八二年)

一、はじめに

現在、日本の階級闘争の中で民主主義の問題が、正しく生かされていない。民主主義や人民ということが、プロ独やプロレタリアートとは、違うものとして理解され、社会主義へ至る革命についての実践を混乱させている。一方に、民主主義と、戦後憲法や議会制民主主義を同一視し、ブルジョア民主主義擁護に一面化する傾向があり、他方に、人民の民主主義的要求をブルジョア民主主

義の実現でしかないとする傾向がある。たとえば、「自衛隊をひきだせ」といった、敵のファシズムをひきだし、その反動化への人民の決起を夢想する「革命家」さえもいる。

前者は、独占資本主義のもとで、社会主義に対置して民主主義をもちだし、現実の改良のつみ重ねの延長に、社会主義を考える行動綱領主義的思考に規定されている。逆に、後者は、日本が本質的にブルジョア独裁国家であるから、民主主義が不可能だとして、あるいは、民主主義

と対置した形で、社会主義を一面的に強調する最大限綱領主義的思考である。

これは、どちらも民主主義を正しく問うことができないために、一方は、敵の道具を、自分たちの道具と錯覚し、他方は、民主主義が革命を速さけるものという考えをもっている。

今日、この民主主義と社会主義をめぐる理論と実践にいろいろな混乱と誤りがあり、これを整理してみることは重要である。

民主主義というとき、二つの側面から統一的にとらえていかねばならない。一方は、現存する直接的な、打撃対象である国家権力の問題として、他方では、それを出発点として、その国家権力をいかに打倒していくのかというアプローチ、あるいは、労働者階級の階級的自己解放を実現しめく目的・手段→うちたてるべき国家権力→と、その実体として革命を遂行する主体の組織化を究がいかに援助していくかという主体的問題、としてとらえていかねばならない。

なぜならば、第一に、民主主義とは、階級支配とはなれてありえず、政治制度・国家権力の問題であり、没階級的、超歴史的にとらえることは誤りであるからである。

第二に、抑圧されている人民の側が民主主義を要求するとき、階級支配をうち破る革命性を内包しているが故に、革命主体形成の問題として、とらえねばならないからである。この二つの側面をとらえてこそ、その連関もとらえられる。

民主主義に関する論争がかみあわないのは、一つの側面を、本質だとして、他の側面に対置したり、他方では、一つの側面を、現実だとして、他の側面に対置するためである。

そこで、われわれは、階級支配としての民主主義の問題をとらえかえしながら、日本革命における革命主体形成、すなわち、人民権力樹立としての民主主義と社会主義の問題へと展開していきたい。

二、国家形態としての民主主義

1、民主主義とは、国家の形態である

民主主義は、戦後、ファシズム支配にかわって、日本の政治理念として、人民の前にたちあらわれた。全体主義にかわって、個人を尊重する理念をもって日本社会に普及した。明治以来、不徹底なブルジョア革命によって、民主主義が根づかなかった日本では、封建的な、諸社会

性を進歩へおきかえるテコとして、民主主義は、一定の役割を果たしてきた。

しかし、階級が存在し、あるいは階級が死滅しつつある過程において、民主主義もまた、階級的にとらえなければならぬ。

民主主義とは、国家形態であり、国家の一変種としてとらえなければならない。

従って、それはあらゆる国家と同じように、多数者への少数者の服従を認める国家、つまり、一階級が他の階級に対して、系統的に暴力を行使する組織である。

しかし、他方で、民主主義は、市民間の平等の形式的な承認を、国家制度の決定と国家統治とに対する全市民の平等な権利の形式的な承認を意味する。

民主主義は、その発展のある段階で、第一に、資本主義に対して革命的な階級を團結させて、この階級に、ブルジョア国家機構を粉碎し、地球上から一掃し、それらのものをやはり、国家機構ではあるが、民主主義的な国家機構で、——人民が一人のこらず参加する全人民武装へ移行しつつある武装した労働者階級・人民という形で、おきかえる可能性を与える。

民主主義のこのような発展は、ブルジョア社会の枠を

ており、それが適応される度合も違う。

資本主義社会での民主主義も、資本主義的生産関係に照応したブルジョア民主主義がある。生産手段を所有するブルジョア階級と、生産手段を所有しないプロレタリアートという階級関係、つまり、賃金奴隷制が、資本主義的生産関係である。同時に、それは、資本が、人間の労働力をはじめ、あらゆるものを商品化し、全社会的に支配していくが故に、最も完成した、最高の私的所有制である。それ故、ブルジョア民主主義のいう「自由」「平等」は、私的所有の自由と私有財産の保護を骨格とするが、その意味するところは、一方における「搾取・収奪する自由」があり、他方における「無所有の自由」あるいは、「搾取・収奪されるしかない自由」があり、それに立脚したところに、形式的な「平等」が存在するだけである。この、「自由」と「平等」は、国家機構（法律・官僚体制と軍隊）によって、維持される。

いいかえれば、ブルジョア民主主義は、ブルジョア独裁の政治形態である。彼らは憲法をつくり、議会を設け、また普通選挙制度も定めて、形式的に政治的自由をたてる。にもかかわらず、主権在民は真に実現されず、議会制民主主義という政治の仕組みによって、人民が民主主

こえることと、この社会主義的改造のはじまりと結びついている。もし、すべての人民が国家の統治と機構を自主的に担うならばもはや資本主義は維持されえないだろう。

2、民主主義は歴史的性格をもつ

民主主義は、こえてはならない限界ではなく、封建制度から資本主義に至り、資本主義から共産主義へ至る途上の一段階にすぎない。

民主主義は超歴史のものではなく、歴史的性格を帯びている。「あらゆる民主主義は、一般にあらゆる政治上部構造（……）と同様に、結局は生産に奉仕し、結局はその社会の生産関係によって規定される」（ふたたび労働組合について）レーニン）

あらゆる民主主義は、常に生産力と生産関係に規定された政治制度の上に、主権を握る階級の価値観によってその内容を規定されてきた。古代に民主主義が芽ばえて以来の数千年を通じて、ある支配階級が別の支配階級と交替するにつれて民主主義の形態も不可避に交替してきた。古代ギリシャの諸共和国と、中世の諸都市と、資本主義諸国とは、民主主義はそれぞれ違った形態をもつ

義を実現する可能性を制限している。常に、人民本位の実現は妨げられる。資本の支配のもとでは、いつでも、富めるものための、搾取者のための、せまい、切りつめられた、偽善的な民主主義である。

しかし、人民中心の実現を求める志向性から生まれる民主主義要求は、常に、そうしたブルジョア民主主義を規定する生産関係Ⅱ階級関係を否定し、止揚していくベクトルをもたざるをえない。人民の階級闘争において、人民中心をあらゆる領域で実質的に実現しようとする。こと、いいかえれば、人民の民主主義を徹底しようとすることは、自らの解放を実現していく上で重要な意義をもっている。

3、民主主義とは人民の支配である。

民主主義とは人民が支配することであり、平等を意味する。完全で一貫した民主主義は、人民権力と一致する。民主主義のための労働者階級・人民の闘争がどんなに大きな意義をもっているかは、平等を階級の止揚という意味に正しく理解するならば明白である。

民主主義は、結局資本主義的生産関係と、その担い手の価値観、政治形態に規定されているから、生産手段が

全人民的所有となり、経済的、社会的に階級が廃絶され、人民が思想的、物質的統一を実現していくことで、實質的に、人々の平等は実現され、真に人民すべてにとっての民主主義となる。

すべての人民が、国家・経済・文化生活のすべての面にわたって、それらの統治と執行を自主的に行い、人民の支配を文字どおり実現しぬくものとなる。

ここでは、単に政治領域だけではなく、全社会生活が人民中心に、人民によって支配されるのである。この人民の、労働者階級の階級性に導かれる主体性と社会主義意識の成長は、やがて、民主主義が政治的権力として行われるのではなく、いく。その原則は、人々の社会生活における、共に、現実を変革して目的意識的に生きる生活を実現し、自己と社会を自主的にコントロールする能力を高めるものとなる。

人民が、自ら国家の統治を学び、自らこの仕事をその手にひきうけ、ひとにぎりの旧支配階級や資本主義的あるいは小ブル的要素に対する統制を組織したときから、あらゆる統治一般（独裁）の必要も消滅しはじめる。民主主義が完全になればなる程、それが不必要となるときに近づけていく。労働者階級を指導階級とし、武装した

人民からなっていて、もはや本来の意味での国家ではない国家が、民主主義的となればなる程、あらゆる国家は急速に死滅しはじめる。

三、労働者階級独裁と民主主義

1、労働者階級独裁とは、人民の民主主義の徹底であり、旧支配階級の統制を意味する

労働者階級の独裁は、政治的支配を失いつつある階級の暴力的反抗を弾圧する必要から生れたという点では、他の階級の独裁に似ている。労働者階級の独裁が、他の階級の独裁―封建制における地主階級の独裁、資本主義におけるブルジョアジーの独裁―と根本的に違っているのは、地主やブルジョアジーの独裁が、住民の大多数、つまり、人民の反抗を暴力的に弾圧するものであったという点にある。労働者階級の独裁は、これに反して、搾取者、つまり、ひとにぎりの支配階級である地主と資本家の反抗を暴力的に弾圧することである。

このことから次のことが導びかれる。つまり、労働者階級の独裁は、一般的にいつて民主主義の諸形態や制度の変化が避けられないということにとどまらず、住民の圧倒的多数、すなわち、人民のための民主主義を未曾有

に発展させ、拡大するという変化をかならずひきおこすということがそれである。

プロ独の本質は、資本主義によって正に抑圧されていた階級、すなわち、労働者階級・人民の大衆組織が、国家権力全体、国家機構全体の唯一の基礎となる点にある。

人民は権力を行使し、民主主義を徹底する闘いの中で、社会主義をかちとり、発展させ、共産主義へ導く統一と力をつくりだす。単に過渡期においてだけでなく、社会主義のもとでも、国家の民主主義的統治に、常に、確実に、しかも決定的な役割をもって人民が参加するのである。

2、民主主義なくして社会主義はない

「社会主義は、次の二つの意味で、民主主義がなければ不可能である。(一)プロレタリアートは、民主主義のためには闘争によって社会主義革命の準備をしなければ、この革命を遂行することができない。(二)勝利をおさめた社会主義は、民主主義を完全に実現しなければ、自分の勝利を維持し、人類を国家の死滅へみちびいてゆくことができない」(「マルクス主義の戯画と」『帝国主義的経済主義』)につ

いて「レーニン」。なぜなら、プロレタリア民主主義は、勤労大衆の大衆諸組織を常時、確実に国家の統治に参加させることによって、あらゆる国家の完全な死滅をただちに準備しはじめるからである。

「民主主義を徹底的に発展させること、このような発展の諸形態を探求すること、これらの形態を實踐によって検証すること等―すべてこうしたことは社会革命のための闘争の諸任務を構成するものの一つである。一つ一つをとれば、どのような民主主義も社会主義をもたらすものではない。しかし、実生活では、民主主義は決して『一つ一つとられる』ものではなく、『いっしょにとられる』ものであって、経済に対してもその影響を及ぼし、経済の改革を促進すると共に、経済的發展の影響をうける、等々。これが生きた歴史の弁証法である」(「国家と革命」レーニン)。

四、独占資本と人民革命

1、革命の現実形態

今日の段階における革命は、もちろんのこと、資本主義的生産関係の廃絶と社会主義のための、プロレタリア革命である。そして、革命は世界的、一元的な同質的な

革命の内実をもって、われわれは社会主義・共産主義を建設することを終局目的としている。

しかし、その本質をもってきて、無媒介に、現実形態的な日本の当面する革命にあてはめることは、観念論・形式論理に陥るものとなる。本質は、世界歴史の全局的な発展と連関し、相互に關係しあう現実的個性の中には生まれ、そこでの自然成長性を革命しながら、より目的意識的なもの、普遍本質へと高めていくことが必要である。

プロレタリア革命を実現するとき、それを現実の世界―国家から出発し、労働者階級・人民が権力の主体となっていくことを実現しぬく、権力問題、党組織論、戦術を通じて、アプローチするのである。

単に、党が普遍本質をあらゆる現象の中に政治暴露するだけでは労働者階級・人民を支配階級に育成していくことはできない。革命の主体である労働者階級・人民自身が、歴史を縦軸として、諸階級・諸国家の相互關係性を横軸として、自己の現実的位置を何よりも自覚しなければならぬ。自らの闘い、個性、場所性に規定された自然発生性から目的意識性(政治といつてもいいが)をつかみ、思想的・組織的同一を生活経験の総括として

いる。国家権力は、ブルジョアジー一般ではなく、ひと握りの独占資本の手に握られている。独占資本は、無制限の国家権力を通じて、政治・経済・軍事・文化の全一的支配を行い、労働者階級・人民への収奪と抑圧を行い、帝国主義として、第三世界の搾取と民族抑圧を貫徹している。

独占資本が対立するのは、労働者階級とだけではなく、ますます全人民と対立するようになる。日本独占資本は、日米軍事同盟の強化と軍国主義強化の道、人民の民主的権利の圧迫、搾取と収奪を強める道を、さらにすすめるようにしている。それ故、独占資本は、人民との矛盾を深め、人民の生活の不安定、不確さを激化させている。独占資本は自分のまわりに敵対する階級諸關係をつくりだし、すべての人民を自己に対決させるので、自己の政治支配を維持するために、民主主義の否定を不可避とする。それは政治的反動と暴力へむかう。このことは、独占資本にとっては、一時的、偶然的なものでなく、帝国主義の統治形態の属性である。日本の独占資本は上からの暴力強化を、下からの合意を組織する方法、たとえば、現在、軍国主義化の要としての憲法改悪策動は、自民党、政府による自衛隊強化や法的反動化としてすすめ

つかみとっていくことによって、社会革命のための主体を組織しぬけるのである。

現代の過渡期世界における、資本主義から社会主義への移行を現実化するために、現実形態に立脚して革命を組織しなければならぬ。

2、独占と人民の矛盾の増大

一般に、帝国主義は、その本質上反民主主義的であり、どのような政治秩序のもとにおいても、全面的な反動への傾向を生み出す。レーニンが述べたように、「民主主義から政治的反動への転換が、新しい経済の上に独占資本主義……の上に立つ政治的上部構造である。自由競争には民主主義が照応する。独占には政治的反動が照応する」。帝国主義の支配は、民主主義一般、民主主義全体の「否定」であり、真の民主主義と両立しない。

いまの日本の現実、日本独占資本の支配のもとにあるという日本の現実にもついで、当面の革命を考えていく必要がある。

ひと握りの日本独占資本は、国家権力を牛耳り、労働者階級をはじめとする日本人民の進歩をはばみ、日本人民をひき続き抑圧民族として第三世界人民に敵対させて

ながら、他方において、地方自治体による「改憲」要求など、様々な形での「国民的合意」の形成を組織しようとしている。それは、同時に、諸階級・階層を、地域別、職能別に分断・差別・包圍しつつ、「人民による人民の抑圧・支配」として貫徹しようとするものである。典型的には、今、人民統合の要として労働者の職場支配にもついで、「経営参加」や右翼的「労戦統一」をすすめている。

総じて、帝国主義に固有な反動への傾向は、日本的特殊性の中で、支配階級によって戦略的に進行させられている。それは、当然ながら、労働者階級・人民から抵抗と逆作用をうける。その逆作用は、民主主義的な憤激としてあり、帝国主義に反対する社会主義のめざめと不可分に結びついている。それを基盤に、独占資本と人民の間の矛盾が強まり、民主主義を否定する帝国主義と、民主主義をめざす人民との敵対が激化する。

人民の反帝国主義運動は、独占資本の権力の解体を通して、人民が国の決定者となるように、人民の意志と力をうちきたえていくものである。社会主義は単に経済に還元されない。人民の質的統一と労働者階級の指導権が確立され、反独占の統一の質的・量的拡大こそ、プロ独

つまり、階級の止揚にむけた権力樹立過程として展望しうる。生産手段の共有化が、階級廃絶の物質的根拠であるが、小規模生産と、それに結びついた習慣と因習の力を克服すること、すなわち、人民の価値観(思想)を統一することなしに階級の廃絶はありえない。それ故、政治的・宗教的相違をのりこえた人民の、反帝共同行動は、様々な人民的諸潮流の相互理解と統一をうちきたえ、民主主義を徹底することによって、人民の統一の中に、プロ独の質を準備していくのである。現時点から、人民自身を闘いの中心にすえ、その闘いが統一された力として権力を創出していく。

現実には、権力が独占資本の手に集中し全人民との矛盾をかたちづくっているとき、権力樹立の闘いのホコ先が反帝と結びついていることを無視できない。民主主義をいうからといって、人民の民主主義的反帝国主義運動を、ブルジョア民主主義革命と同一視することはできない。人民の民主主義のための闘争は、個々の要求をかちとることそのものに中心的な意義があるというより、敵と対決しつつ、階級廃絶にむけて、現時点から、人民権力の実体をつくりだしていることに核心がある。

民主主義の要求を、一定の歴史的時代の具体的基盤と

社会主義にむけた目的志向性ときりはなして、抽象的に提起してはならない。かつて、民主主義の要求が、封建制あるいは、専制権力にむけられていたときは、人民の民主主義運動が、ブルジョア革命を領導した。人民が革命の主体となり、世界的な社会主義への移行の時代には、政治的自由、民族解放のための民主主義運動が、反帝社会主義と合流している。封建的諸関係の残存物によって生みだされた民主主義運動ですら、反帝の闘争になっっている。なぜなら、独占資本は、「近代的」な基盤の上に、それらの不幸の古い形態を復活させているからである。民主主義の要求を根本的に、全体として実現するために、独占資本の権力を粉砕、解体しなければならず、社会主義の旗のもとでの人民的革命的闘争を通じる以外にはありえない。

これまで民主主義の意味する客観的位置をみてきた。次に、日本人民の現実の闘いを単一の世界プロレタリアートへの同質化、階級解放、人間解放の普遍的内容の獲得にむけて、戦略化していくという主体と実践方向の問題として、民主主義を把握しなければならぬ。民主主義を戦略問題として解明するために、第一に、権力問題、第二に、これを実践するための主体の形成と組織化、

第三に、戦術の問題を考えねばならない。

五、戦術論としての民主主義

民主主義とは、階級支配のための政治形態であるが、同時に、抑圧されている人民の側が民主主義を要求して闘うとき、階級支配をうち破る力を内包している。それ故、民主主義を戦略的視点からとらえかえすために、現実から出発し、本質をつかみ、革命の主体的具体方法を追求していこう。

1、現実から出発しなければならぬ

現実から出発するということは、個別的現象を恣意的にとりあげていいということではなく、現実を、国際的、歴史的位置としてまず規定し、日本の個別の特実情をとりえ、未来にむかっの現在をとらえるということである。つまり、

第一に、当面の革命は、現在の世界的な歴史の発展段階における一国の位置、及び、当面の革命の中に準備される国際的、歴史的な連続性の質によって規定しなければならぬ。

第二に、日本の権力構造は、独占資本の手に権力が握

られているということ。それ故、帝国主義だからプロレタリアートとブルジョアジの矛盾、即座の社会主義とするのでは、現実形態的な資本主義の矛盾の本質をとらえきれない。革命は権力の問題であり、独占資本の権力を奪取することに力を集中しなければならぬ。そのことを通じてはじめて、労働者階級の指導のもとに、人民が権力を樹立し、社会主義への移行、資本主義の廃絶をも可能とする。

第三に、共産主義の成熟は現在の革命の中に実現されねばならない。

国際的、歴史的位置として、現在をとらえるという意味では、「日本革命家の任務」等で、総括的に主要点を、提起してきた。それは、一言でいえば、資本主義から、社会主義への過渡期の現代において、世界革命は、人民を主体とする革命をおとして成熟している。つまり、帝国主義諸国人民・第三世界人民、そして、社会主義諸国人民が、帝国主義に対決し、世界階級闘争の有機的連関の中で、反帝戦線を形成・発展させていることである。それ故にこそ、世界単一の人類解放をめざし、主体的に、目的意識的な同質化を遂行する労働者階級と党の役割がとりわけ、重要なのである。

そこで、ここにおいては、主に日本の実情をふまへながら、現実の中から、共産主義・社会主義をつくりだすことを中心にみていこう。

共産主義は、賃金奴隷労働を廃棄し、あらゆる階級の支配を階級そのものとともに止揚した、真に平等で自由な人間関係の社会を実現する。同時に、小国家への人類の細分状況をなくし、諸民族の抑圧と一切の孤立性をなくし、諸民族の融合をかちとることを実現する。

しかし、共産主義はあるべき理念ではない。それは、人類の歴史的遺産の上に現実の矛盾・困難を変革することを通じて、社会的実践を総括し、人々が目的志向性（価値観）を統一しながら生きようとする人類社会の最高形態として、目的意識的に実現される。人類社会発展の力は、生産力と生産関係の矛盾にあるが、それは何よりも、主体である人間、現実の生きた人間の目的意識的な社会的実践によってつくられてきた。また、人民の歴史は、集団的に、現実を変革することを通じて、社会を発展させてきた歴史である。それは、共に生きていくことに自覚的な相互の連帯であり、常に現実の困難・矛盾を変革して生きるという動因に革命の推進力がある。

その意味で、即自的プロ、即自的人民、即自的民族の

で、ひとり独立した形で、あるいは自分の階級のことだけみては、先進国の労働者の解放の問題を考えるとできない。労働者階級の位置と役割を、資本との関係だけでなく、自己の生活や生産の中に包括される社外工や下請け工、農民や農業を無視し、第三世界を無視するならば、自分自身の階級としての成熟も解放もありえない。

労働者階級は、徹底した階級の非和解性と最も強い集団的本性を持ち、自己と対象世界を変革しつづけることによって、例外なく社会全体を解放する階級の本質（階級性）をもつ。レーニン「偉大な創意」の中で、次のように書いている。

「勝利するためには、社会主義を創設し確立するためには、プロレタリアートは二重の、あるいは一体となった二つの任務を解決しなければならない。それは、第一に、プロレタリアートは資本に対する革命的闘争で、その身体的な英雄主義によって、勤労被搾取者の全大衆を引きつけ、ブルジョアジーを打倒し、ブルジョアジーのあらゆる反抗を完全に鎮圧するために、これを引きつけ、組織し、指導すること。第二に、プロレタリアートは、新しい経済建設の道に、新しい連係、新しい労働規律、新

あり方、利害を肯定しては、いかに、経済的に私有財産制が廃棄されたとしても、階級・国家の止揚を、実現しえない。まして、現在の革命の中で、現状の自己を肯定しては、労働者階級が、他の諸階級に対してヘゲモニーを保持し、労働者階級の独裁、その実体的基礎である人民の統一を実現しえない。

革命をなしとげるためには、すべての人類（社会全体）を搾取と抑圧から解放しなければ、自分を解放できない労働者階級が、その階級の自己解放の任務を遂行しうるに足る階級としての資質を成熟させねばならない。そういう労働者階級の階級としての成熟は、社会主義においてはじめて行われるものではない。資本主義社会において、その闘争の中で、そして、諸階級・諸民族の関係性において、自己を対象化し自己変革しながら、自然成長性を目的意識性に転化していくことによってかちとる。つまり、すべての人類を解放しなければ自分を解放できない階級としての自覚は、常に、全人民の問題を自分の問題として考えるということであり、どの国の労働者人民・民族の問題も常に、自分の問題として考えるということであり、農業と農民、第三世界の遅れた状態、その生活水準・文化水準、抑圧民族としての位置をはなれ

しい労働組織——科学と資本主義的技術の最新の成果を、大規模な社会主義的生産をつくりだしつつある、自覚した労働者の大衆の団結に、結びつけているところの——をつくりだす道に、勤労被搾取者の全大衆をも、小ブルジョア層全体をも導いていくことである」と。レーニンは、第二の任務は第一の任務より困難であるが、一層本質的なものである、といっている。なぜなら、それこそ、社会主義の内実をつくりだすからである。

そこで、われわれは、次のように考える。敵権力を打倒したあとに、形態的に社会主義をつくるということではなく、人民総体がこの労働者階級の変革の力と指導性に導かれ、共通の敵と闘いながら、価値を統一し、共に、現実を変革して生きる力を人民連合（ソビエト）——人民権力として実体化していく中に、社会主義の内実をつくりだしていかねばならない。

われわれのいう人民とは、労働者階級を含む革命を最後まで遂行する能力を総括した概念であり、農民・都市小ブルが労働者階級と共に、革命の中で自己を変革し、労働者階級を支持し、共に闘うということを表現している。あるがままの小ブルにとっては、自己の私有財産・自己の運命のことが中心であり、その限りでは、いかに、

「説得と教育」を外行的に行おうと、革命の力に労働者階級性に導かれた人民の統一はありえない。現実の独占資本との矛盾は、小ブルをも革命に決起させるが、そこには、変革の根拠があり、その自然成長性の変革によって、労働者階級との思想的統一を実現していくことができる。

従って、この共産主義の事業の貫徹のためにも、「共産主義的意識の大量的産出」のためにも、「人間の大量的変化」が必要である。そして、これは、現実を、共に変革していく闘い、共通の敵に対して、世界一日本の人民が目的意識性をついにしつづけながら統一をつくりあげていく闘いにおいてのみ実現される。この革命一人民の質的・量的統一過程こそ、人民の権力を創造し、階級としての成熟にプロレタリアヘゲモニーと国際主義を実現していく過程である。

当面の革命は、独占資本の権力を打倒することにある。そして、その闘いの中で、下からの人民自身の統一として、まさに、プロ独を過渡期とする共産主義のもとで実現される労働者階級性にもとづく、階級・階級的差異の止揚が、党の統一と人民の統一の関係性に準備されねばならず、人と人との生活における結びつきが、人民

中心のものに変革されなければならない。そして、人民権力の樹立は、物質的にも、思想的にも、人民が中心となった社会主義的変革を実現していくことによってできる。

その意味で、レーニンがいうように、民族自決権の承認がなければ、民族の接近と融合がありえないように、人民の民主主義が徹底されていかなければ、プロヘゲモニーと人民の質的統一を実現しえない。

2、反独占人民革命こそ社会主義革命の水路をきりひろく

反独占闘争の参加者は、しばしば自己の闘争の現実の客観的内容を自覚せず、また、ぼんやりとしか自覚せず、それと社会主義のための闘争との結びつきを理解していないか、または、よく理解していない。民主主義と社会主義の勢力の強化は、何の矛盾も闘争もなしに生じる直線的な過程ではない。反対に、それは複雑で矛盾にみちている。反独占人民革命勢力は、決して、自然成長的には階級の方向性、政治的統一の特徴をもつものではない。その内部には、社会主義的傾向も、そうでない傾向もある。それ自身は、二つの階級間の闘争の、人民内部

の反映である。自然発生性とは階級性に対する闘争と変革によって、目的意識性と階級性を闘いとり、人民内部の矛盾を克服していく結果として、人民が量的・質的統一をかちとっていく。

民主主義のための闘争の中で、人民は帝国主義こそ反民主主義の根源であり、従って、社会主義革命だけが、真に人民的な民主主義の大道につながっていることを政治経験として実地に認識する。人民は、全体として民主主義を闘いとうとすることによって、いわば、階級闘争の舞台をはききよめ、資本主義を直接に廃絶するときを近づける。

民主主義のための闘争は、広範な勤労大衆を政治的に啓発し、社会主義に導き、これをプロレタリアートとの統一にむかわせる。民主主義それ自身としては階級的抑圧を除去せず、階級闘争をより純粋に、より明白に、より鋭くする。そして、あらゆる諸階級が、その中で自己を対象化していく。

民主主義のための闘いが、社会主義革命の準備となり、革命は、そこから絶えず、新しい担い手をくみだす。真に民主主義的な方向での人民革命が、徹底的であれば、より社会主義革命の基盤を準備し、これを近づけ、

その土台をひろげ、小ブルと半プロ大衆、労働者階級の絶えず新しい層を社会主義的闘争にひき入れていく。民主主義的要求を全体として実現しようとして独占資本と対決し、根本的な社会主義的改造が必要であるという自覚に至る。

人民革命は、独占資本から権力を奪取し、プロレタリアートの社会革命の流れに合流する。

3、民主主義のための闘いは、個別要求闘争ではない
民主主義のための闘いは、日常闘争・経済闘争に限定されない。また、個別政治課題を実現するということでもない。民主主義は全体として闘いとするものである。現実に人民自身が表現している思想や要求にもとづきながら、国際主義と人民権力を樹立する立場からみて、事実として独占資本と矛盾しながら、人民自身が、まだ自覚していない根本的要求や思想を目的意識化し、具体化することが必要である。個別の課題、個別の闘争を、歴史的視野と世界革命過程の全体からみて、位置づけ、それ自身を人民の自覚として組織化していくことが必要である。人民自身は現実の生活上の困難を克服し、よりよく生きていくために闘っている。そこにははらまれる自然成

長性、一國性、個別性を自己変革しながら、人民の政治的成熟をたかめ、この目的意識性の発展にもとづいた組織的行動一統一が、結果として、権力の打倒を成功させるのである。

経済闘争、民主主義闘争が、自然に、政治闘争へ発展していくという自然成長論、逆に、政治闘争からというとき、人民の自然発生性に社会主義意識を付与するという考えも誤っている。いずれもが、革命の主体を人民とみず、党の社会主義理念を生かすことを中心に考えている。それは、社会主義の名において、実践的には経済主義（政治主義）の傾向、社会主義と議会制民主主義とが共存しうると考える傾向としてあらわれている。

人民の思想的統一、人民権力は、労働者階級の指導と援助のもとに、人民諸階層の諸要求（反独占）に根ざし、この実践を総括した政治的自覚が、さらに人民諸階層の現実の諸要求実現の闘争を意識づけ、その闘争を深化発展させる過程を通じてなしとげられるものである。だから、日常生活と政治闘争のどれをとってみても、独占資本との対決をとおして、自己一対象変革のベクトルをもたず、ただ単に、ありのままを肯定することでは、目的意識性は生れてこない。

することである。国家権力、その実体である官僚、警察、軍隊等の権力機構を打ち砕き、人民自身が、武装し、人民権力をうちたてることを主要な内容とする。人民革命が権力奪取の瞬間において、労働者階級の指導性の準備の程度、諸階級の勢力配置によって、その社会主義的性が決定されるにせよ、革命権力の当初において過渡的政策をとるにせよ、プロレタリアートの指導権による人民の支配、人民の民主主義の徹底と旧支配階級への独裁である以上、人民権力は、プロレタリアートを準備している。独占資本打倒に結集する総力によって人民権力がうちたてられ、資本主義的生産様式総体の廃絶にむかって、継続的に革命が進行する。なぜなら、人民の眞の解放は、共産主義以外になしとげることができないし、人民自身の民主主義をより完全なものにする要求は高まるからである。独占資本を打倒しても、資本主義そのものを廃絶したわけではない。それ故、すべての働く人民が、共に、共通の価値に結ばれて、現実を変革しながら生きていくためには、社会が階級、階級の差異に分裂していることを止揚しなくてはならない。この物質的基礎としての生産手段を全人民の所有とし、全社会構成員がプロレタリアートを支持し、物質的、思想的に統一（同質化）をか

民主主義のための闘いは、人民諸勢力の経済的・政治的要求を政治闘争に統一する過程と結びついて発展する。政治闘争は、人民勢力の現実の利益の具体的な実現と社会主義の実現とをつなぐ環であり、労働者階級のもとに全体を統一していく基本条件となる。

民主主義のための闘いは、戦略的見通し、国際主義に規定されてはじめて独自性をもつ。その中心は、人民が社会の主人公となって権力を直接行使し、人民中心の社会を実現しめくということにある。従って、「民主主義」という形態を問題にしているのではない。

人民革命は、帝國主義から独占資本のない資本主義へという、第二インターの道ではなく、改良主義や修正主義の、構造改革の道ではない。それは、社会主義のための闘争の端緒であり、形態は民主主義でも、内容上は社会主義への成熟をつくるものである。

4、人民革命は、社会主義革命の一構成要素である。当面する反独占人民革命は、独占資本主義支配の道から、人民が社会の主人公となって権力を行使する人民共和国の道への決定的転換点である。

人民革命の目的は、権力を獲得すること、革命を継続

ちとり、全民族の対等、平等を実現すること、そういう社会主義へとすすまなくてはならない。

社会主義革命は、人民革命の中から、革命的エネルギーと物質的根拠をくみとり、この人民革命の実現と成果の上に、社会主義・共産主義へと成長する。

社会主義革命の成熟、その政治勢力の配置と階級形成は、人民革命の成長ときりはなすことはできない。この発展の土台は、労働者階級・人民の知恵と力であり、それらへの党の援助である。

人民革命と社会主義革命は、高度に発展した日本帝国主义の条件のもとで、単一の革命過程としてあらわれる。それらのものは、形態は違うが、たがいに段階化したり、きりはなしたりすることはできない。いってみれば、人民革命は、社会主義的変革に橋をかけるものである。人民革命は、社会主義的発展の展望と合致する。

このように、日本帝国主义のもとにおける民主主義のための闘い、人民革命は、社会主義のための一構成要素である。それ故、人民革命は社会主義からきりはなされたり、対置させられるなら、社会主義革命の前進をさまたげるものとなる。

だから、問題は、終局目標をひきのばさず、独占資本

から権力奪取し、人民権力を樹立していく闘争を通じて、もっとも広範な反独占で利害を共通する人民が参加する闘争を通じて、社会主義にむかって革命を永続させることである。

人民革命は、資本主義的諸関係の構造を根本からゆるがし、全一性をやぶる。そして、これを革命的に破壊する前提と、止揚の方向に歩を進める可能性をつくりだす。

人民革命は、独立の意義を失うことなしに、同時に、社会主義革命のテコとなり、また、社会主義の第一期をきりひらく。

人民革命は、社会主義革命の一構成要素ではあるが、全体を表現しぬくものではない。それらは、階級廃絶の革命的飛躍を準備し、その形態を規定し、出発点となるが、社会主義革命への継続をとりさげるものとはならない。プロレタリアートの指導性に導かれながら、人民革命のもとで、社会主義の道へ入っていく。独占資本の収奪、人民権力の確立、社会生活のすべての側面での広範な民主主義の実現はプロ独を深化させる。

六、革命と改良

国家権力のすべての分野、段階にわたって、直接かつ有効に社会の統治を自治することを現在の闘いの中でどのように準備しぬくかということではなければならない。日本の社会において存在する階級・階層の固定化と分断支配・差別と闘い、日々、下からの人民権力を形成し、住民の大多数を占めるプロレタリアートのヘゲモニーの量的・質的な社会的広がりと、人民の共感・連帯を保障しぬかねばならない。民主主義実現は、まさに、人民の力と意志にかかっている。こうした反独占の統一戦線としての、反独占人民連合の質的・量的拡大こそ、人民権力の実体をつくり、人民権力の樹立過程として展望しうる。

また、現在のには、帝国主義的統治の環である軍国主義との闘いにむけて、人民の共同行動をおすすすめ、その中で、様々な人民的諸潮流の相互理解と統一をうちきたえねばならない。この共同行動は、工場、農村、公的機関、生活現場、大学などいたるところで、下から展開される。人民連合に結集する広範な人民、社会・政治勢力全体の力をもって、二重権力状況を創出せねばならない。

戦術的に民主主義という形態をもつのは、社会主義を否定せず、また、資本主義の枠の中で完全解放されるこ

1、戦術としての民主主義

人民権力確立以前において、現実にくりひろげられていく階級闘争を戦略実現にむけていく、戦術が必要となる。人民の自然成長性に方向を与え、運動の全体の利益から規定していくことがなければどのような闘いも資本主義の枠をこえない。敵の出方・政策に個々、民主主義要求をつきつけても、その延長には何ものも生みださない。

戦術は戦略の一部であり、それを実現するあらゆる方法・形態であり、戦略ぬきには意味をもちえない。党にとって戦術問題が重要なのは、人民自身が闘争を通じて、当面の権力樹立を可能にするために、どのように援助するかという問題と、プロ独をうちきたえるために、どういう組織方針がとられるべきなのかという問題の解決のための統一的な指導のあり方としてあるからである。

すでにのべた、共産主義や人民権力の考え方からみたととき、下からの人民権力建設に力を尽し、現場からの力を質的に統一し、人民の階級化を促進する統一的政治指導を保証するものでなければならない。

そして、人民にとって、人民が社会の主人公となって、

とを夢想するからではない。民主主義を抑圧し、人民を差別・分断し、人民の政治、生活や文化・教育を破壊しているのはまさに独占資本主義そのものである。ただ闘いの性格が、階級攻防の形態が、独占資本と全人民の闘いという点において、民主主義なのである。人民が権力をとらない限り、内容とは別に、形態は、どのような闘いも、民主主義、あるいは改良闘争以上のものではない。現実の変革をとおして不断に、自然成長性が止揚され、目的実現にむけた方法・形態が与えられるとき「すべての階級闘争は政治闘争である」といいうる。政治課題をいかに戦術的に闘おうと、それが自動的に政治闘争になるわけではない。経済闘争か、政治闘争か、という形態ではなく、党と人民の自然成長性を目的からみて変革し、常に社会的実践の総括として目的意識性（戦略、路線）をつかんでいるとき、いずれもが、権力闘争と結びつく。自然発生性に拝跪するかぎり、政治闘争に、それどころか、政治革命にさえ参加しても、それだけでは労働者階級、党の政治は、社会主義的なものにはならない。

2、改良主義

自然成長的に、人民の切実な要求は、反独占の民主主

義的な改良要求として生れる。その中では、労働者階級が本質的に資本主義と対立しているのに、自民党を支持するといった、思想と要求との間に、矛盾すらはらむのである。

しかし、人民本位の実現を求める志向性をもつ中で生れる民主主義要求は、常に、ブルジョア民主主義を規定する階級関係を否定し、止揚するベクトルをもたざるをえない。従って独占資本の全政治体系とつきあたらせる仕方、人民自身がその思想にふさわしく要求をもつように、つまり、人民本位を実現する仕方からみて最もふさわしい人民の民主主義の徹底化の戦術を必要とする。

政治における人民の民主主義、人民の労働と生活を、豊かに、自主的に築きあげていくための、社会・経済諸関係における人民の民主主義、人民が内外の帝国主義と闘い、諸国人民の統一をかちとるための、国の進路―軍事・外交における人民の民主主義、それらは、政治権力の問題にぶつかる。体制の革命的変革に転化するものと提起しなければならぬ。

資本主義のもとで、一連の革命なしに根本的な民主主義的要求は実現されないとして、民主主義のための革命的闘争の否定に導いてはならない。民主主義的要求を、

改良主義的に提出するのではなく、革命的にかつ、人民の要求と思想の矛盾から出発し、それを克服していくものとして、提起しなければならぬ。

改良主義は、実生活の中に現存する民主主義任務が階級の廃絶という本質にむかうものとして提起されず、両者をきりはなしている。

改良主義、修正主義は、人民権力としてある、真の民主主義をつくりだす権力問題を否定すると同時に、民主主義を階級、国家の止揚ではなく、階級の調和、分配の平等の問題にきりちぢめている。

3、労働者階級の成熟

階級的・政治的意識は、生産点での資本との非和解性を根拠としつつ、そこから生れる自然成長性を階級総体の中で自己変革していくときに実現されていく。労働者階級の自己認識は、どの階級に関係したことで、自己の問題としてとらえ、また、人民のすべての階級、階層、集団の活動と生活の総体から、対象化するとき、それが、政治生活の経験にもとづいた理解であるとき、かちとることができる。「経済闘争の外部から、労働者の雇主に對する関係の圏外からだけ」階級的・政治的意識をもたら

すことができる。その意味は、全社会、全人類を解放することなくして自己解放がありえない労働者階級は、敵と全人民、他民族総体との関係性の中で、自己対象―自己変革しない限り、階級としての形成がありえないということにある。従って、階級的成熟⇨組織化の源泉は、すべての階級と階層の国家および政府に対する関係の領域、すべての階級の相互関係の領域にある。

簡単にいえば、敵を明確に知り、すべての人民に奉仕し、味方全体を解放するために、自分が何をしないといけないか、そこから、自分の闘いの方向をつくりだしていくということに階級としての成熟がある。

いわゆる、「外部注入論」は二つの意味で誤っている。一つは、党がいかに理念として共産主義を理解しているも、それ自身は目的意識性ではないということである。

現実の階級総体の社会的実践を総括し、人民総体と党の自然成長性を革命していく内容として、目的意識性をもちうることに無自覚だということである。党が目的意識性で、人民総体が自然成長性なのではなく、人民総体の実践と関係性から自己対象化するときにはじめて、党自身、目的意識性（党の立脚点、路線）をもつ。

他の一つは、労働者階級の自己教育の問題としてとら

えていないことである。労働者が資本主義の中にあつて、自然発生的ののみあれば、当然、企業主義や民族主義をもつ。階級意識や国際主義は、目的意識的なものであるが、それは、労働者自身が、資本主義と社会主義の二つの価値の自己―人民総体への反映の中で、味方の不十分さ、つまり、自己（その自然発生性と非階級性）と闘争し、全人民の統一を実現していくことによって、かちとられる。労働者階級の成熟は、敵との非妥協な闘いと全人民の統一―つまり、プロレタリアートを支配階級として高めることにあらわされるのである。

その意味で、改良が、革命の一部となるか、逆に、改良にしかならないかどうかは、労働者階級の自然発生性―あらゆる闘争における政治的意識のひらめきを社会主義意識に自己闘争⇨変革を通して高めていくことにあつた。それは、まさに、党の役割として存在する。

労働者階級の力は、あらゆる人民の闘いを全国的に統一し、単一の団結形態⇨反独占人民連合をつくりあげ、全国の闘いが相互に支えあうことの中でつちかわれる。

人民が分散している限り、階級の統一の力もありえない。反独占に結集するすべての人々が、自らの闘いと同時に、人が生きていく志向性を、現存の物質的諸関係の

変革を通じて一つにしていく闘いにおいて発揮する労働者階級の指導性を支持、信頼することなしに、プロ独はありえない。人民諸勢力の統一を進展させ、独占に反対するあらゆる力を結集する反独占人民連合を、人民の政治参加の直接的姿としてつくりだすことなしにプロ独はありえない。

七、党の役割

革命は広範な人民の事業であり、その中心任務は、独占資本の権力を打倒することとどまらず、人民自身の手で自らの権力を創出することにある。そして、終局目標である共産主義は、これまで人類の知らない空想的、理念的なものではなく、歴史的遺産をうけつぎ、現実の階級総体の社会的実践を総括し、目的志向性を一つにしなから生きようとする人類社会のよりよい最高形態として、目的意識的な変革をもって形成する。この人民の、共に、目的意識的に生活そのものを変革しながら、自治する共同社会として、人民中心の価値、生き方を実現する。

党は、こうした共産主義の目的意識をもって、権力奪取をめざすのであるなら、党の代行主義、政権担当能力

の強化ではなく、人民権力強化として、革命過程を担わなければならない。権力奪取後も、その瞬間から新しい社会制度のもとで国家と党の死滅を展望するが故に、党は下からの人民権力―人民の統一実現に最大の力を注ぎ、党を中心としない。革命が人民自身の事業である以上、必ず、人民の社会的実践から出発しなければならない、人民の志向性の中から方向をつかみ、共に、闘いぬかなければならない。

人民権力創出のための戦略的要は、人民の統一と党の統一を闘いとしていくところにある。人民の質的統一と、プロレタリアヘゲモニーをうちきたえ、人民の統一した力で権力を創出していく。人民の主権、国の主人公として、終局的には社会主義・共産主義をめざすその闘争において、民主主義と政治的自由、民族自決のための共同行動は、人民の自覚的な相互の連帯と統一をつくりだす。民主主義は、そこにこそ意味をもつ。

党が果すべき役割は、人民中心の観点から、第一に、反独占人民革命を人民の統一、反独占人民連合形成を中心に準備しぬく。第二に、労働者階級性を現実の闘いの中で深める。階級性に立脚した現在の闘いによって反独占人民革命の階級的性格を保障し、プロ独の質を準備

しぬく。第三に、日本人民に依拠しつつ、革命の国際的性格、同質化を実現し、常に国際主義の立場で闘う。第四に、プロ独の執行、支配階級の打倒の闘いを組織的に保障するものでなければならぬ。それは、敵の白衛隊・警察・官僚の反革命武力を十分粉砕できるだけでな

く、労働者階級の優位性と指導性のもとに人民の力量を十分発揮できるように、蜂起の陣型と人民の武装を建設しなければならぬ。そのために、党の独自の政治・軍事力量を準備し、指導勢力の統一を人民の統一と照応させてかちとっていく必要がある。